

平成30年 10月31日	病害虫発生予報 11月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
-----------------	-------------------------------	------------------------

**収穫後は被害残渣や被害葉を圃場から持ち出し、
次作の病害虫の発生を抑えましょう！**

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
冬レタス：菌核病	1
【その他の病害虫】	
ナシ，イチゴ，促成ピーマン，促成キュウリ，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ	1
【防除所レポート】	
ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策	3
本年のブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策	4
II. 今月の気象予報	5

最新の農薬登録内容は、（独）農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」（http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm）で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

冬レタス

1. 菌核病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県西地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、発病株率（本年値 5.3%，平年値 2.5%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 75%，平年値 39%）は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 排水不良は発病を助長するため、排水対策を行う。
- ② 発病を認めた場合は、菌核が形成される前に発病株を圃場外に持ち出し適切に処分する。
- ③ 多発すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。
- ④ 薬剤散布は、収穫前日数、使用回数等に注意し、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、周辺作物等へ飛散（ドリフト）しないよう注意して散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：—	10月中旬現在、秋型病斑の発生は全県平均では平年並であるが、県南地域では平年より多い。発病葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋めるかロータリー耕によりすきこむ等、落葉処理を徹底する。 (平成30年10月19日発表 病害虫速報No.4 参照)
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少ない	10月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	ハダニ類		
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多い	10月下旬現在、平年並の発生である。10月1日からのフェロモントラップへの誘殺数は、平年よりやや多い～多い。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	アザミウマ類		
促成キュウリ	黄化えそ病	発生量：－	10月上旬現在，抑制キュウリにおいて発生を確認している。媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除対策等を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	べと病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
冬レタス	腐敗病	発生量：多い	10月下旬現在，一部圃場で発生が確認され，平年より多い発生である。
秋冬ネギ	黒斑病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ネギアザミウマ		

ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策

県内 82 地点の水田において、ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況を調査したところ、全市町村で発生を確認しています。翌年の縞葉枯病の発生を少なくするため、速やかにひこばえをすき込むとともに、冬季の畦畔等の除草に努め、ウイルスを保有したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

[現在の発生状況]

- 平成 30 年 9～10 月に調査した結果、すべての地点でイネ縞葉枯病の発生を確認した（図）。
- 県西地域の平均発病株率は 21.1%と県内で最も高かった（表）。
- 市町村別の最高発病株率は、0.3～88.7%であった（図、表）。

[防除対策]

- ひこばえは、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株であると、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する。
- 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。

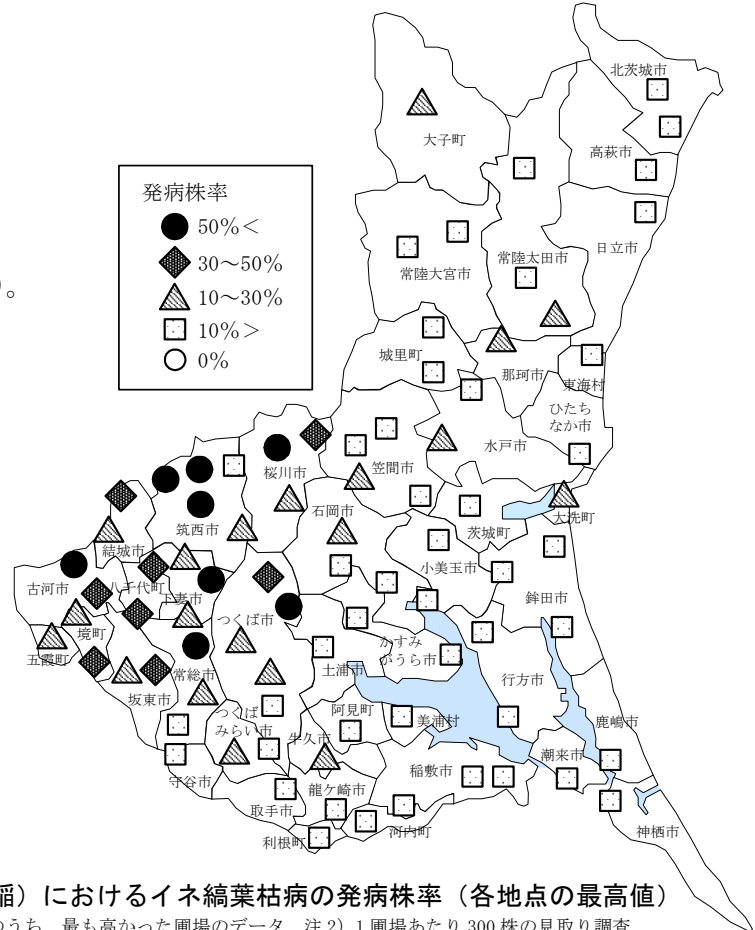


図 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発病株率（各地点の最高値）
注1) 調査した5圃場/地点のうち、最も高かった圃場のデータ 注2) 1圃場あたり300株の見取り調査

表 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の各市町村別の平均発病株率および最高発病株率

地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)	
		平均 ¹⁾	最高 ²⁾			平均	最高			平均	最高
県北	日立市	2.9	3.3	県南	鹿嶋市	0.1	0.7	県南	守谷市	2.6	6.0
	常陸太田市	4.0	13.7		神栖市	1.5	2.7		つくばみらい市	5.2	12.7
	高萩市	2.8	5.0		鉾田市	0.7	2.0		利根町	0.2	0.3
	北茨城市	1.4	6.0		潮来市	0.9	2.7		県南平均	5.5	-
	常陸大宮市	3.5	7.0		行方市	1.0	3.0		下妻市	16.0	52.3
	大子町	7.4	10.7		鹿行平均	0.8	-		筑西市	32.1	88.7
	県北平均	3.5	-		土浦市	5.4	7.3		桜川市	19.2	51.7
県中央	水戸市	6.9	12.3	石岡市	2.8	10.3	結城市	18.6	34.3		
	ひたちなか市	2.2	4.0	かすみがうら市	3.8	9.7	常総市	13.2	62.0		
	那珂市	6.5	14.3	龍ヶ崎市	2.0	3.7	八千代町	21.5	45.7		
	小美玉市	1.7	4.3	牛久市	2.6	10.0	古河市	30.1	60.7		
	茨城市	1.3	2.0	稲敷市	1.2	5.3	坂東市	17.5	39.0		
	大洗町	6.0	10.7	美浦村	2.8	6.3	五霞町	13.3	16.7		
	東海村	0.7	1.3	阿見町	1.3	2.0	境町	16.1	31.3		
	笠間市	4.3	10.0	河内町	2.0	4.7	県西平均	21.1	-		
	城里町	3.5	9.0	取手市	0.7	2.7	全県平均	9.3	-		
	県中央平均	3.9	-	つくば市	14.7	51.0					

1) 各市町村1～6地点の平均値。1地点あたり5圃場調査（300株/圃場）
2) 市町村内で最も高かった圃場のデータ

本年のブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策

本年のブドウにおける主な病害の発生状況をまとめました。休眠期は薬剤による防除のほか、落葉処理や巻きひげの除去等、病虫害の発生しにくい圃場の整備に努めましょう。

1. 晩腐病

本年は平年より早い7月下旬から発生を確認し、8月の発病果房率は平年より高かった（表）。

- 症状** 果実表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ（写真）、果皮にしわがよってミイラ化する。
- 感染経路** 病原菌は結果母枝等に潜在的に感染しており、5～7月頃に降雨により果実に伝搬され、その後の酸度低下・糖度の高まりとともに発病する。
- 防除対策** ◇病原菌の越冬場所となる結果母枝、巻きひげ、果梗の切り残し等を剪定時に取り除き、適切に処分する。
◇本年多発した圃場では、次年度也多発する可能性があるため、発芽前の休眠期防除および開花直前から大豆粒大期までの予防散布に重点を置く。
◇傘かけや袋かけを行う。例年発生が問題となる圃場では雨よけ施設の導入を検討する。

2. べと病

本年は7月下旬から発生を確認し、9月下旬に急増した（表）。

- 症状** 若葉では緑色が薄れた病斑、成葉では葉脈に囲まれた角型の黄色病斑を形成し、葉裏には毛足の長い白いかびが密生する。果穂に発病すると果実の肥大が停止する。
- 感染経路** 病原菌は被害葉の組織内で越冬し、5月の展葉期ごろから雨水や風で葉に到達する。発病後は葉裏の白いかびから2次伝染を繰り返す。
- 防除対策** 落葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋める等、適切に処分する。

3. 褐斑病

本年は平年より遅い9月下旬に発生を確認し、発病葉率は平年よりやや低かった（表）。

- 症状** 葉に黒褐色の病斑を生じ、表裏に黒ずんだかびが見られる。発病が激しいと早期に黄化落葉し、果房の着色不良や糖度低下を招く。
- 感染経路** 病原菌は、結果母枝や枝の粗皮、落葉に付着して越冬する。これらが開花期ごろから風雨によって飛散し、伝染源となる。
- 防除対策** 翌年の伝染源となるため、落葉は集めて土中深く埋めるとともに、結果母枝等は剪定時に取り除き、適切に処分する。



写真 晩腐病による被害果実

表 晩腐病、べと病および褐斑病の発生推移 (%)

病害名	調査項目		6月	7月	8月	9月
晩腐病	発病果房率	本年	0	0.8	12.0	- *
		平年	0	0	2.7	-
べと病	発病葉率	本年	0	0.1	0.2	7.0
		平年	0.3	2.5	3.9	6.6
褐斑病	発病葉率	本年	0	0	0	2.1
		平年	0	1.4	2.8	14.8

* 収穫済みのため欠測

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 10月27日から11月26日)

気象庁(10月25日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	40	40	20
日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 10月27日(土曜日)から11月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 11月3日(土曜日)から11月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

<3週目から4週目の予報> 11月10日(土曜日)から11月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード, IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成30年4月26日発表)の防除所レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。